ISSN 0918-1954

アルパック ニュースレター

犬も歩けば風景を眺める－ベネツィアにて－（本文中に関連記事があります）

アルパック　ニュースレター　もくじ　1993年11月1日

●したたかな都市イベント戦略 …… 2
●「アカデミアプラン」と「新条里都市イメージ」の提案 …… 4
●「なごやビデオ絵日記」奮闘記 …… 6
●思い出の館－勤労会館－の解体 …… 8
●オフィス街の古紙のリサイクル …… 9
●変わりつつあるサービスエリア …… 9
●佛教大学の講義活動に取り組む …… 10
●新刊旧刊書評紹介 …… 11
●まちかど …… 12

NO.62

したたかな都市イベント戦略
～リンツ・アルスエレクトロニカとベネツィア・ビエンナーレの報告～

尾関　利勝

アート＆メディアの動向を見る

６月なかば、足早にリンツのアルスエレクトロニカとベネツィア・ビエンナーレを中心にアート＆メディアの動向調査を目的として、ヨーロッパ各地を回った。

デザイン博以来、アート＆テクノロジーをキーワードとする都市づくり戦略が名古屋で定着しつつある。このキーワードは名古屋に限らず、産業都市と言われる日本の各都市にも共通するテーマと考え、茂登山清文名古屋芸大助教授とご一緒に視察企画を立てた。

（N－α）次産業は文化に転換する

N次産業の時代には（N－α）次産業がホビーやアートとして文化に転換するということを、高田公理先生（武庫川女子大学）や片木篤先生（名古屋大学）と地域産業活性化をテーマとして議論したことがある。このことは、特定の専門分野だけに見られがちな産業考古学を都市の表舞台に浮かび上がらせると同時に産業活動の裏方になりがちな、かつ３Ｋ産業としてプライドを喪失しつつある製造業の現場に観光や遊戯の発想から光をあてる契機ともなった。以来地域の文化を産業発展との連環から把え、産業技術の文化化を都市戦略の基本テーマの一つとして重視し、その具体化に向けての模索と提案を様々な角度で行ってきた。今回の視察企画はこの流れを背景にしている。

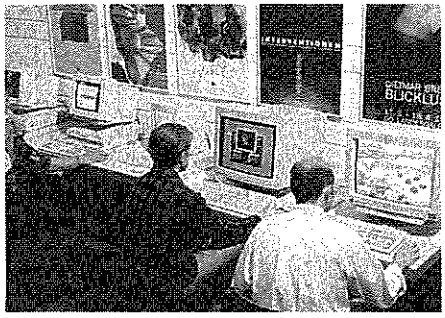
町ぐるみの芸術祭 "ARS ELECTRONICA"

リンツは国際都市・音楽都市であるウィーンとザルツブルグの中間、かつてはオーストリーの中心的産業都市、地方文化中心として発展したドナウ川沿いの人口約20万の小都市である。衰退する産業都市の振興をめざして始められ、1979年からは現在のように毎年開催されているのが "ARS ELECTRONICA"（電子芸術祭）で、今回は「遺伝芸術－人工生命」をテーマとして５日間の祭が開かれた（展覧会は１ヶ月）。

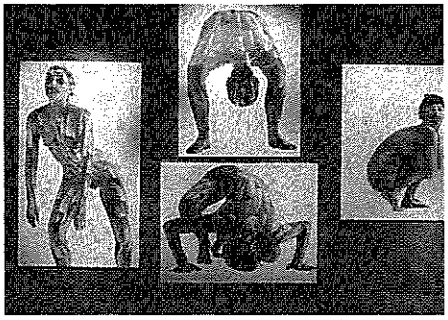
作品は世界各国から集められた実験的なＣＧやバイオ技術を応用した作品、インタラクティブアートなどの美術館での展示、音楽堂ブルックナーハウスでの展示とともに、夜にはドイツのコンピューターミュージックバンド・クラフトワークや同じ作品をクラシックで演奏するバラネスクオーケストラの演奏会が行われ、国営放送局ＯＲＦを開放した展示とシンポジウム、それらの中継放送など、小さな町が町ぐるみで祭を楽しんでいるようであった。会期中は各国から作家、評論家、技術者などの関係者が集まり、日本からも坂根慶応大学教授など蒼々たるメンバーが参加し、名刺交換会のように自由な交換が行われた。展示や催しにはシリコングラフィックス社やアップル、日本のオリンパスなどのスポンサーがつき、あたかも一種の情報メッセと感じた。ちなみにこの祭は観光シーズン前の６月に開催されたが、オフの秋にはウィーンやザルツブルグの音楽祭と期を一にし、日本からも音楽家の冨田勲氏が参加してドナウ川を音と光で飾る一大音楽イベントを開催した。

夏のベネツィアは展覧会都市

ベネツィアはアドリア海に浮かぶ港町で町中に張り巡らせた運河で有名な国際観光都市である。The Cardinal Point of Art（芸術の方位基点）を今回のテーマとするビエンナー



アルスエレクトロニカ：美術館でのＣＧ作品展示例



ベネツィア・ビエンナーレ：出展作品の例

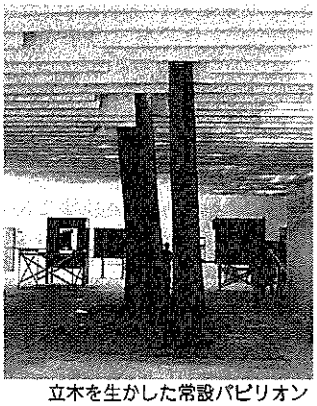
レは19世紀以来45回目を迎え、世界40カ国から代表的現代芸術作家の作品を集め、６月半ばから10月10日までの約４ヶ月間、市内11カ所のエキジビション会場で開催された。また市内14の美術館で各種の展覧会が同時に開催され、夏から秋のベネツィアはあたかも展覧会都市のようであった。メイン会場のビエンナーレ公園は、今回の国際芸術展の他に映画祭や建築展の会場ともなる展示専用公園ともいえる場で、総合展示場や国別展示場が常設館として設置されている。この他屋外空間を使ったユニークな作品が所せましと展示され、これらは１～２日では到底鑑賞しきれるものではない。117の島々を結ぶ150の運河と400の橋、９世紀以来の歴史を持つベネツィアの町並みを背景に25の会場で繰り広げられる芸術展はまさに町中が観光と美術館でもある世界有数のアミュージアム・シティといえよう。

求められる「サーキットの発想」

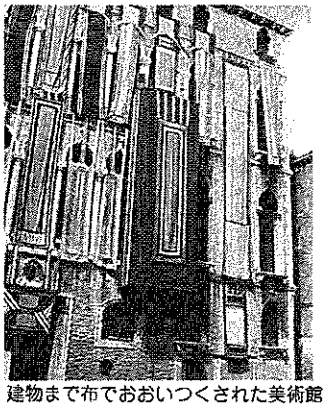
上記は夫々国際的に有名な芸術イベントであるが、それが単独のイベントとして取り組まれるだけでなく、観光とからめて都市ぐるみで行われる“したたかさ”に特徴がある。都市戦略に「サーキットの発想が必要」と天野昭さん（ニューメディア）が指摘されたことがある。この「ぐるみ」の仕組みがサーキットの典型と思われる。名古屋のアーテックを思い浮かべると、作品群としての遜色はなく、アーテックに来名した、ドイツ人や日本人にリンツで出会うなどその国際性の高さも認められる。しかし、「都市ぐるみ」のギャップが圧倒的に大きいことを痛感した。残念ながら名古屋に限らず日本には「ぐるみ」のサーキット構造がない。リンツは周辺のウィーンやザルツブルグとも連携しながら観光サーキットを構成し、ベネツィアは映画や音楽、建築などアートの国際イベントを、都市中を舞台に経年的に開催している。

この報告の結論は、歴史や文化を産業や地域（都市間）と世界的にサーキットする発想が都市戦略に必要ということだ。産業都市のアイデンティティにこだわれば（Ｎ－α）次産業の文化への転換の原理が都市の文化戦略の視点に不可欠ではないだろうか。

（名古屋事務所　おぜき　としかつ）



立木を生かした常設パビリオン
（ベネツィアビエンナーレ会場）



建物まで布でおおいつくされた美術館
（ベネツィア）

「アカデミアプラン」と「新条里都市イメージ」の提案

ー関西学研都市理念の再構築ー

霜田　稔

関西文化学術研究都市の基本的イメージの再構築として「アカデミアプラン」と「新条里都市イメージ」の提案が、'93年9月7日(財)関西文化学術研究都市推進機構学術委員会（大薮寿一委員長、大久保昌一副委員長）から記者発表された。78年の関西学術研究都市調査懇談会の第1次提言から約15年の歳月を経て、学研都市の現段階を踏まえ、再度理念と都市イメージを構築した提案である。

「関西学研都市」は、構想の提起以来、筑波研究学園都市と並ぶ全国的な文化・学術・研究の新たな拠点として、国の特別立法に基づき、産・学・官の協力による横断的な推進体制のもとで整備され、現在、すでに50を超える研究・教育機関の立地が確定し、日々その姿を現しつつある。

しかし、この間、内外の社会・経済情勢は大きく変化し、文化・学術・研究の分野における我が国の国際的な役割の期待が増大する一方、国内においては、大学改革や技術開発拠点の整備の進展、既存の文化・学術・研究に関わる体制の変化等が著しい。構想当時は筑波に次ぐ唯一の構想の位置づけであった。その特徴を一層明確にする必要があると考えられた。

また、学研都市で今後充実すべき文化・学術・研究活動（以下アカデミア活動と称する）の方向と推進方策を明らかにすることが必要であった。その一方で、「学研都市」が、クラスター型開発と言われる開発地区が分散的で、かつ複合的な事業主体により構成され、5市3町にまたがる区域であること、及び都市構成や既存市街地との関係等相互の関連性等が明確にされていないこと、さらに、将来的な都市の構成イメージの方向が明確でないこと等、全体のイメージが分かりにくいとの意見が各界から出されていた。

以上の背景のもとで、当初の構想（関西学術研究都市調査懇談会の提案及び文化首都構想の提案等）と現在の達成状況を検討し、それに基づき、21世紀の「世界の学研都市」に期待される新たなアカデミア活動の展開のための計画としての「アカデミアプラン」を策定することとした。また都市づくりの長期的なイメージをシンボリックに表現する「新条里都市イメージ」の提案も併せて行った。

「アカデミアプラン」の提案要旨

地球的規模で人類の共存共栄を可能とする新しい文化・文明モデルの構築が今や焦眉の課題であり、先進的なアカデミア活動により、新しい文明の創造を先導する役割を果たすことが重要となっている。また、21世紀に向けて人類が直面している多面的な課題を解決するため、斬新な視点と機動的な人材の結集を可能とする新しいシステムの整備が必要であるとしている。それには、新しいパラダイムへの転換を目指す科学技術の基礎研究が不可欠であることはもちろんであるが、同時に人間の感性や価値の問題、文化・芸術、教育、社会経済システム等に関わる人文社会科学の研究の推進を重視した組織的なアカデミア活動が必要であることを強調している。

上記の視点に基づき、今後重点的に取り組むべき分野として次の3点をあげている。

① 人間の心や感情といった人間存在の基本に関しては、科学と人間感情との間の葛藤や、

科学と宗教との対話の必要性、さらには人間感情の総合的な表現であるトータルアートの基礎研究といった分野が考えられる。例えば、〔21世紀の哲学研究〕〔トータルアートの創造研究〕である。

② 人類の生存条件の確保に応えるためには、激動する世界情勢への対応をはじめ、地球環境問題、資源エネルギー、食糧問題等の分野が提起される。例えば、〔国際関係の枠組の激変と文化的・宗教的相克、及び貧困からの脱却を図る国際問題研究〕〔人類の物的・精神的生存条件に応える研究〕である。

③ 21世紀の生活・産業・都市等の構築に関しては、今後の社会における高度な技術と自然との共生を軸とした学際的な研究の統合が期待されている。これらの実現に向けて21世紀の生活・産業・都市等の研究に関する分野を提案する。例えば、〔将来の共同体、特に都市に関する総合研究〕〔将来産業とその構造に関する総合研究〕である。

「新条里都市イメージ」の提案要旨

21世紀を目前に控え、次第に都市としての姿を現しつつある今日、「学研都市」は、価値観の変化、パラダイムの転換などの時代の変化に対応し、かつ新しい時代の社会的要請に応える新しいモデルを先導する都市を象徴するシンボル的都市イメージが強く求められている。今回の提案は、京阪奈地域の持つ固有の歴史と自然に注目したシンボル的都市イメージである「新条里都市イメージ」を提案している。

学研都市は古代の平城京、恭仁京に一部重層して建設することになっている。当地区の地理、歴史的特徴は以下のようである。

① 地理的に東西南北の地質構造をもっている。笠置断層、及び木津川が東西・南北に貫流し、生駒山系、笠置山系、甘南備山系、矢田山系が南北に縦断し、山背丘陵が東西に並んでいる。

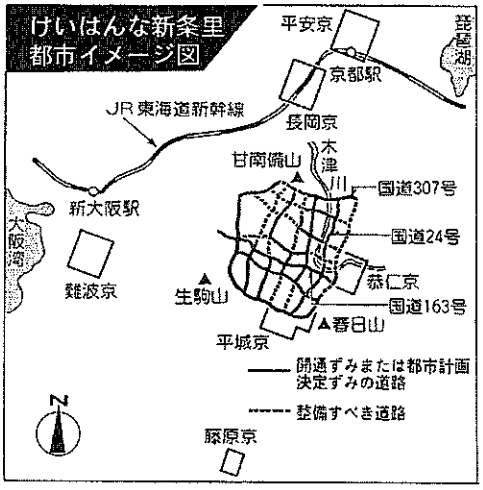
② 木津川沿岸等の水田地帯は、古代の東西南北の条里遺構の痕跡を止めている。

③ 歴史的街道である古山陰道、若狭街道、奈良街道、熊野街道等が南北に、また、伊賀街道、信楽街道等が東西街道として歴史的痕跡を残している。

④ 学研都市の計画区域に接して山城国のシンボルであり、平安京の真南の鎮山である甘南備山、大和国を代表する春日山、河内国を代表する象徴する生駒山の三角地帯に位置する。一方、学研都市構想の中心クラスターである精華・西木津地区では、我々も計画参加したが、東西南北の方位性をもった街路パターンとなっていること。また、奈良市を始め、田辺町、木津町、精華町の既存市街地は、東西南北の方位性を現在も踏襲した都市計画街路のパターンを踏襲している。

以上の考え方から、古代条里都市を現代的に生かし、かつ学研都市の都市像であるイメージにも合致した新条里都市をシンボルイメージとして打ち出すこととした。

（㈱アルパックインターナショナル　しもだ　みのる）



（「日本経済新聞」1993年9月8日）

「なごやビデオ絵日記」奮闘記
～ＳＡＳ全国大会in NAGOYA'93に参加して～

吉田　道子

もし、初めて訪れたまちを歩いて即興でビデオドラマを製作するようにいわれたら、どうしますか。

もし、さらに“女の涙”“近未来大予言”“何か、妖しいゾ”などというテーマを与えられたら、何を撮りますか。…

こんな、大胆かつユニークなイベントをやってしまったのが、全国の都市計画関係者や建築家、行政マンでつくるＳＡＳ（システム・アナリスト・ソサエティー）のメンバーです。今年の全国大会はＳＡＳ名古屋が担当しました。

反響はさまざま。各地の会員の方からは、「私を２日間夢中にさせてくれたＳＡＳ名古屋に感謝。」「名古屋はまた全国大会に布石を残した。」「ビデオは面白い。」「自ら参加でき、とても楽しかった。」などと、嬉しい声が届いています。

今回のメインイベント「なごやビデオ絵日記」がどのように生み出されたのか、コトの始まりについてご紹介しましょう。

フィールドワークを超えた創造的パフォーマンスへの模索

全国大会に向けての活動は半年ほど前から、殆ど毎週会合を開くなど、本格化しました。おざなりなシンポジウムはもうたくさん。名古屋ハラスメントも止そう。10年前、全国大会にフィールドワークを持ち込んだように、今度も新風を吹き込もう。意気込みは充分、テーマもいろいろアイディアは出るが、ではどのように参加してもらうか、どんな方法でＳＡＳ名古屋のメッセージを伝えるか、となると決め手がない。参加の手法と伝えるメディア（人や道具）の模索が続きました。

ドラマ仕立てでビデオを撮ってもらったら面白そうと洩らしたところ、それはイケルということで、話が具体化し、名古屋のどのエリアをどんなテーマで撮ってもらうか、熱い議論が幾度となく繰り返されました。同時にカメラの初心者やまちを知らない人が即席のグループで、こちらの期待どうり名古屋の意外な側面を見出してくれるのだろうかといった懸念についても議論がありました。

ビデオ企画班のメンバーが中心となって、自らビデオカメラを携えてまちを歩き、エトランゼの境地でまちを眺め、テーマを選りすぐり、実現へと漕ぎつけてくれたのです。

創造性はヒトヒネリから生まれる？

全国から名古屋を訪れる会員にとっても、名古屋の会員にとっても、創造的で楽しく、意外性と発見のあるビデオ作品になるようにと、テーマも仕掛けもヒトヒネリしました。

対象地区は市内４か所。予めゾーンを設定し、各地区２グループが対称的なテーマで競いあうというもので、全８グループ、各10～15名で編成しました。もちろんグループ名にもヒネリ技を使っています。

〔地区のテーマとグループ名〕

- 栄地区＝名古屋の都心　Ａ「健康優良地」信長、Ｂ「なんか妖しいゾ！」お市
- 大須地区＝栄南側の門前町　Ａ「ザ産業博物館」秀吉、Ｂ「近未来大予言」ねね
- 四間道(しけみち)地区＝江戸時代の商人町　Ａ「ギャラリー“下町”」家康、Ｂ「都心のブラックホール」お福
- 名古屋港　Ａ「男の汗」護熙、Ｂ「女の涙」かよこ

参加者100余名。ビデオ絵日記本番開始

８月28日快晴。関東を直撃した台風の影響で前日入りできなかったメンバーも続々到着し、早朝からガイダンスが行われました。

街に繰り出した各グループは、ロケハンの後、喫茶店でシナリオ作成。撮影を済ませて、午後２時、発表会場である港のジェティ（ホール）に集合。その間、５時間足らず。

いよいよ発表です。審査員を名古屋芸術大学の茂登山先生、名古屋国際センターの民間大使であるイラン人のラジャイさん、地元ＣＡＴＶの女性ディレクター石田さんの３名にお願いしました。編集なし、撮りっぱなしの10分ビデオ作品を地区毎に鑑賞した後、激しい論戦が繰り広げられ、審査員の先生方が感想を述べ、採点していきます。

結果は予想に反し（？）、どの作品も個性があって上々の出来でした。テーマが違っても撮るものは同じという辛口の意見もありましたが、にわか仕込みのカメラマン、シナリオライター、はたまたアクター、アクトレスにしては立派なものです。

隊員の大きな関心は、名古屋に潜む古さやあやしさを発見し、その背景や意味、そこに生きる人々の気配を感じ「撮る」ことにあったように思われました。

祭りが終わって、今また何かが始まる

せっかく灯した火を絶やさないようにと、現在、頻繁に会合を開いています。大会全体の運営上の反省に始まり、ビデオ絵日記の体験を今後の活動にどう生かすか、仕事と遊びの狭間であるこうしたボランティア活動はどうあるべきか…と議論が再燃しています。

（名古屋事務所　よしだ　みちこ）

◁ロケハン（ヒアリング）

◁撮影打合せ（ミーティング）

△発表会場

あるかナ再発見
あす全国の建築家ら100人
大須など4地点選び
名古屋の街「面」で診断
なごやビデオ絵日記
ミニ番組を競う
100人が撮影楽しむ
道が広いな
人情感じた

△「中日新聞」（右．1993年８月27日）
左．1993年８月29日）

思い出の館ー勤労会館ーの解体

松本　一恭

ドッシャーン！

また、一つ公共建築物が取り壊されました。その建物の名は、京都府立勤労会館です。

思い出

私が小学生の頃、演芸会等の会場として勤労会館に訪れた思い出があります。

その会館の解体工事の監理者になり、思い出の建物を解体撤去しました。

ビルを解体し始める前に、建物自体の事前調査を行いますが、調査をすればするほど、建物は、色々なバクダンをかかえていたことが判明し、幼い頃の楽しい思い出が複雑な思いへと変わりました。

バクダンの撤去

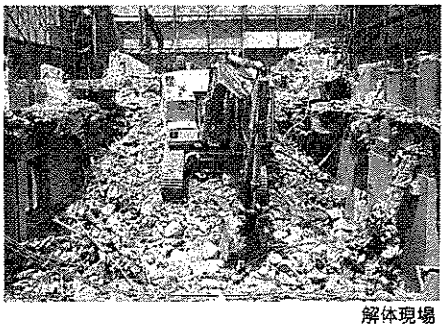
建物を取り壊す前にまず「ひとの霊」の除去から始まりました。30分程のお祈りです。

そして、次にバクダンである公害物質（ＰＣＢ等）の撤去がはじまりましたが、撤去方法について、建設省発行図書等の監理指針には何ら記載されておらず、ひとつひとつ丁寧に手作業で撤去するしかありませんでした。長い時間をかけて、手作業で除去しましたが、そのバクダン自体に処理方法がないのです。各省庁に問い合わせをしましたが、処理方法がないという答えばかりでした。結局、ある建物の施錠付倉庫に保管してもらったり、各省庁の監視のもとで民間の会社に引き取ってもらったりといった具合いになりました。

母体の解体そして再生

バクダンを撤去した後に、新築工事の工程とは逆の工程で、解体をします。内装材の解体撤去、主要構造の解体という工程です。

主要構造の解体は、上層部から下層部へ順番に重機にて解体していきますが、解体された主要構造である鉄筋コンクリートは鉄筋とコンクリートの骨材とに種別し、鉄筋は再び高炉場へ、コンクリートの骨材は土木工事用の材料として再生されます。



解体現場

ダイナマイトによる解体は、この種別再生が困難になり、逆に高価で危険の伴う解体工事となりがちです。

再生できなかった部材は、許可されている処理場へ廃棄されます。

マニフェスト

解体された部材は、マニフェストというチェック監理シートに漏れなく記載され、部材を運んだダンプと部材の量、そして、何処で処理したのかが明確にされています。

バクダン建築群

そのようにして、解体撤去を終えましたが、今回、感じたこととして、解体撤去工事についての法律等がないこと、また、新築工事の際に解体のことも考慮しておいたほうがよいことが、あげられます。

そして、最近、景観論争がたえませんが、大きさや、形状などについての景観を語ることも必要であると思いますが、建物自体が人間にとって安全なものなのかどうかを、基準法以上に議論する必要があるのではないでしょうか。いまやロボットしか安全に住めないようなバクダンを抱えた建築物がかなり多いのではないでしょうか？

（京都事務所　まつき　かずやす）

オフィス街の古紙のリサイクル
ー東京事務所の場合ー

清水　環

皆さんミスコピー紙は、どのようにされていますか？一度コピーして、使われずに捨てられる紙が多いことが、最近妙に気になりだしたのです。事務所の人数が増えたから紙ごみの量も増えたという理由もあるのでしょうが、貧乏性の自分にとってはつらいことでした。資源を有効利用できないかということで試行錯誤した結果、現在東京事務所では、古紙回収を近くの幼稚園の父母の方にお願いしています。種類と大きさによって区別した紙を、紐でくくって出しています。本来なら、自分達が持参すべきでしょうが、お母さん方は大きな台車を引っ張って何軒かのビルを回られているそうです。そのうしろ姿はとてもたくましく見えます。

新宿の回収業者に問い合わせてみると、「ちり紙交換」は行われていないそうです。幼稚園などでの集団回収以外は、お金を払って引き取ってもらうというのが現状です。どこも人件費、ガソリン代、回収価格など採算を考えるともっと多くお金をもらわないとやっていけないそうです。つまり、誰もがやりたがらないということでした。新聞では、「回収価格の下落が止まらず中間流通業者の転廃棄や回収停止といったリサイクル機能の崩壊の始まり」と報じていました。また、回収奨励で流通価格下落という悪循環からか、おじさんたちの声もそれとなく元気がなかった気がします。相場が下がっている古雑誌の引き取りを拒否する業者などもあり、リサイクルルートの確立の必要性を強く感じました。

古紙のリサイクルについて事務所会議の議題としてとりあげた結果(？)、回収をお願いする以前と比べて、事務所で無駄にしていた紙が減ってきたという事実があります。これは裏紙をのりで製本し、ノートのように使えるようにした器用な人など、皆がそれぞれ考え、うまく利用するようになったということです。それぞれの心構えと、創意工夫によってはこのように変わるということが重要なことだったのではないでしょうか。

（東京事務所　しみず　たまき）

変わりつつあるサービスエリア

伊坂　善明

「マイカーモータリゼーション」が叫ばれ出して随分になりますが、高速道路の利用も生活の末端にまで浸透し始めてきています。

そうした中で、高速道路の休憩及びサービス施設であるサービスエリア（ＳＡ）やパーキングエリア（ＰＡ）についても従来のものから、大きく変わりつつあります。そこで、この間、調べたいくつかをレポートします。

わかりやすいコンセプトによる個性化

童謡作家の三木露風の生誕地の竜野市にある竜野西ＳＡ（山陽自動車道）では、「赤トンボ」や「童謡」をコンセプトとしてレストハウスの外観や内装、屋外の園地などに生かしています。下松ＳＡでは「星の降る里」をテーマとしたまちづくりを進めている下松市に因んで、「星座」「星」をコンセプトとして施設の各所に活用しています。

このように、立地する地域のまちづくりイメージをコンセプトに活用しているものが、新しいものを中心として増えています。

多様なサービスの提供

東名高速道路の足柄ＳＡでは、宿泊、仮眠のためのレストインのほか、浴場やコインランドリーを用意し、さらに高速道路では手に

入れにくい薬を置いたドラッグストアや切手・はがき販売、郵便預金のＣＤ（現金自動支払機）などのポスタルサービスを行うなど、利用者のサービスニーズに合わせて、多様なサービス内容を提供する例が増えています。

ハイウェイ・オアシスによる外との連携

海水浴場との連携（徳光ＰＡ、北陸自動車道）、子供の国との連携（砂川ＳＡ、道央自動車道）などＳＡ、ＰＡの外にある施設と自由に行き来できるようにしたハイウェイ・オアシス事業を行っている例もあります。

（京都事務所　いさか　よしあき）

星座のモニュメントを配した園地
（山陽自動車道下松サービスエリア）

佛教大学の講義活動に取り組む

山口　繁雄

京都事務所では、佛教大学の後期の講義活動に集団的に取り組むことになりました。

担当するスタッフは、竹内参与、金井社長ほか京都事務所の５名。担当する講義内容は、『地域づくり論』（総合学際科目の社会系）で、予定している講義内容と担当者は下記のとおりです。

佛教大学では、これまでも講義に民間人を多く活用していますが、今回のように一組織に一科目の講義をまとめて依頼するのは初めてのケースのようで、いわば実験的取組だということです。

我々としても、そうした要請に応えて、民間組織としての強みを発揮して、「計画現場からの視点」の少しまとまった講義ができるようにしたいと考えています。

うまくいくようでしたら、後でとりまとめを行ってみたいとも考えていますが、さてどうなりますか。

佛教大学講義内容

①『総論／地域をみる目』　（ 9/21 金井）
　～環境・活動・個性・主体
②『まちづくりと地域開発』　（ 9/28 山口）
　～経済大国から生活大国へ
③『市町村計画』　（10/ 5 伊坂）
　～地域づくりと計画
④『むらおこしと産業の活性化』（10/12 金井）
　～アクセス・産業文化・資源・創業
⑤『まちづくりと高齢化』　（10/19 竹内）
　～社会的弱者にやさしいまちづくり
⑥『まちづくりと環境』　（10/26 金井）
　～健在・時間・空間・心の豊かさ
⑦『リゾート計画』　（11/ 9 山口）
　～観光からソフトツーリズムへ
⑧『まちづくりと景観』　（11/16 山田）
　～景観と都市
⑨『アーバンデザイン計画』　（11/30 中根）
　～魅力的なまちづくりとは
⑩『住民参加のまちづくり』　（12/ 7 石本）
　～京都のまちづくりの事例を通して
⑪『まちづくりと住民』　（12/14 竹内）
　～福祉の風土づくりを例として
⑫『コンサルタント及び
　シンクタンクの社会的役割』（12/21 金井）
　～ﾌﾟﾗﾝﾅｰ・ﾌﾟﾛﾃﾞｭｰｻｰ・ﾅﾋﾞｹﾞｰﾀｰ・ＤＯﾀﾝｸ
⑬『地域づくり・人づくり
　・事業づくりの展開』（ 1/11 金井）
　～現地・住民・統合・実証

（京都事務所　やまぐち　しげお）

新刊旧刊書評紹介

童門　冬二　著　　学陽書房（1983年）

「上杉鷹山」

紹介　森脇　宏

企業のリストラの教科書として、上杉鷹山がブームですが、ここで上杉鷹山を取り上げるのは、そういう趣旨ではありません。鷹山は倹約家で有名ですが、地域振興にも優れており、その政策等には賛同する部分も多いことから、地域振興にも関わるコンサルタントとして、この小説を紹介することとしました。

上杉鷹山は、18世紀後半、弱冠17歳で九州の小藩から米沢藩に養子に入り、米沢藩の財政再建に大きな貢献をしました。当時の米沢藩は、何十年、何百年かかっても返せないほどの借金難に陥っており、藩士への給料も、半分を藩に強制カンパさせているような始末でした。こうした藩財政を立て直すため、思いきった倹約や殖産政策等に取り組み、その努力の結果、天明の大飢饉で全国の各藩に餓死者が出ても、米沢藩では餓死者を出さなかったと言われています。

鷹山の地域振興策の中で、私自身が興味深く思ったのは、次の３点です。

第一には、東北での米作には限界があるため、地域特性に見合った産業で、原料生産だけでなく、加工（高付加価値化）まで行うことを追求して、様々な殖産を試みています。近隣の藩の織物や漆器等の技術導入を図り、桑や紅花を植え、池や水路等で錦鯉を飼うことなどを奨励して、これらの多くは、今日も米沢地方の特産品となっています。

第二には、殖産に際し、これまでの武家社会の「常識」を打ち破り、実利的な具体化策を提案したことです。すなわち、老人や子供に鯉の世話をさせ、養蚕から織物は藩士の妻や母に委ね、それぞれ貴重な現金収入を与え、低い給与をカバーさせました。また、藩士の家の敷地でも桑等を植えさせ、技術導入のための技術者を大胆に高い報酬で雇いました。

第三には、単に産業至上主義でなく、民生福祉や教育等も重視し、こうした領民の富の向上が藩政の目的で、藩の財政力向上につながるという発想です。この考え方は米沢藩主に代々伝わる“伝国の辞”に集約化されており、この内容は、その４～５年前に行われたフランスの人権宣言にすら類似しています。

また、こうした鷹山の基本姿勢を示す象徴として、次の２つの事象が、今日的にも意義が大きいように感じられました。

一つは、田沼意次に代表される収賄政治と一線を引き、清廉潔白な道を歩みました。藩の財政立て直しの最大の貢献者である家老が、汚れ役をこなすうちに収賄構造に浸かってしまったのにも、泣いて馬稷（ばしょく）を斬りました。

二つめは、役人同士のしきたりやならわしを守る「お城の仕事」では財政再建の役に立たないと、生産的労働を武士にも奨励しました。「お城の仕事」に近い建前主義的な仕事を我々もしてはいないかと、他山の石にしたいと思いました。

小説の中心テーマは、人間“上杉鷹山”ですが、地域振興の面から、こういう読み方もできると思います。

（大阪事務所　もりわき　ひろし）

まちかど

湧き水の宝物

小阪 昌裕

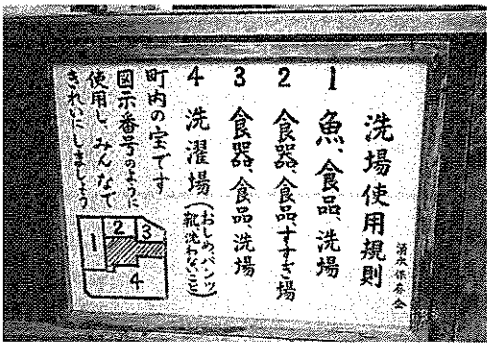
島原は、名水百選にも選ばれた、長崎県の湧き水の城下まち。市内に約40ヶ所の湧き水があるといわれる。道端の水路に鯉の泳ぐ情景とともに、思わずたたずんでしまう路地のポケットパークで見かけた「町内の宝」の洗場。

水は高きより低きに流るというが、その性質に加え湧き水の清潔さと冷たさの活用が十分に生かされた“ハイタッチ”感覚のもの。近くには、豆腐屋さんと寒ざらし（湧き水を引いたタイル貼りの水槽で白玉を冷やし、湧き水で溶かした特製の密で食べる）の店もあり、付近は湧き水の文化が育むまちかどそのもの。

湧水保存会の洗場使用規則は、わかりやすいルールで自然の恵みを大切に使うシステムで、湧き水のような町衆の知恵の象徴と感じられ、ともすると忘れがちな美しいまちづくりの原点を教えられたかのようでした。

（大阪事務所　こさか　まさひろ）

生活に根づく洗場



きれいなものから順番に

寒ざらしの店内でも湧き水の流れ

アルパック　㈱地域計画建築研究所

ARCHITECTS. REGIONAL PLANNERS & ASSOCIATES. KYOTO

本社 京都事務所	〒600	京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町82 （大和銀行京都ビル6階）	TEL FAX	(075)221－5132㈹ (075)256－1764
大阪事務所	〒540	大阪市中央区城見1－4－70 （住友生命OBPプラザビル15階）	TEL FAX	(06) 942－5732㈹ (06) 941－7478
名古屋事務所	〒460	名古屋市中区丸の内3丁目18番30号 （ツボウチビル2階）	TEL FAX	(052)962－1224㈹ (052)962－1225
東京事務所	〒160	東京都新宿区新宿2－5－16 （靄ビル401号）	TEL FAX	(03)3226－9130㈹ (03)3226－9560
㈱九州地域計画研究所	〒810	福岡市中央区天神1丁目15番1号 （日之出ビル6階）	TEL FAX	(092)731－7671㈹ (092)731－7673
㈱アルパックインターナショナル	〒540	大阪市中央区城見1－4－70 （住友生命OBPプラザビル15階）	TEL FAX	(06) 965－2012㈹ (06) 965－2014
㈱都市居住文化研究所	〒604	京都市中京区東洞院通六角上ル 三文字町225 （朝陽ビル4階）	TEL FAX	(075)252－2231 (075)252－4417